

『就実教育実践研究』第9巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2016年3月31日 発行

社会的養護児童の子育ち・子育てを
支援可能とする地域社会の特徴
— 西和賀町（旧沢内村）を事例として —

**The features of local community which helps children
in social care to grow : the case study of Nishiwaga City**

笹倉 千佳弘 ・ 井上 寿美

社会的養護児童の子育ち・子育てを 支援可能とする地域社会の特徴

— 西和賀町（旧沢内村）を事例として —

笹倉千佳弘（幼児教育学科）、井上寿美（関西福祉大学発達教育学部児童教育学科）

The features of local community which helps children
in social care to grow : the case study of Nishiwaga City

Chikahiro SASAKURA (Department of Preschool Education)

Hisami INOUE (Kansai University of Social Welfare)

抄録：本稿の目的は、西和賀町（旧沢内村）を事例として取りあげ、社会的養護児童の子育ち・子育てを支援可能とする地域社会の特徴を明らかにすることである。聞き取り調査で収集したデータをSCAT法を参考にして分析した結果、西和賀町（旧沢内村）という地域社会の特徴は、1. 経済資本所有量の少ない時代から現在に至る文字文化への親和性、2. 地元愛に裏打ちされた自負心と仲間意識をとまなう地区住民意識、3. 必要性の共有により頻繁に繰り返される対話と具体的アクション、という3点であることが明らかになった。

キーワード：文字文化、自負心、地区住民意識、対話、具体的アクション

I. 背景・目的

児童養護施設（1997年児童福祉法改定以前は「養護施設」）の目的は、従来、子どもを「養護すること」であったが、1997年の児童福祉法改定にともない、その目的に、「自立を支援すること」が加えられた。さらに2004年の改定では、「退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うこと」と明記され、児童養護施設の目的は、保護から自立支援へと変わった。それにともなって、子どもの自立を視野に入れた取り組みが重視されるようになった。しかし、東京都福祉保健局（2011）や認定NPO法人ブリッジフォースマイル調査チーム（2013）の調査では、児童養護施設等¹の子どもが施設等を退所した後の自立の難しさについて指摘されている。

先行研究で取り上げられている児童養護施設等退所後の自立の困難事例（立川2000；大村2006；相澤2008等）から言えることは、児童養護施設等退所者の自立を阻んでいる生活困難の多くは、彼女/彼らが、所属意識を有していない外集団との関係の困難さに起因し

ているということである(笹倉・井上2015)。例えば、児童養護施設退所者へのインタビューをおこなった全国社会福祉協議会(2009)の調査結果ではそのことが顕著に表れており、中でも児童養護施設退所後の「孤立感」が目立っている。「自らの人生の異質性への意識が、『自分のことをわかってくれる人はいない』『人は信用できない』といった思いをもたらし、孤立感を増幅させる」ことや、「頼ろうとしてもひとへの頼り方がわからない」(全国社会福祉協議会2009:162)というような状況が、退所後の困難を引き起こしていると言うのである。

上記を勘案すると、児童養護施設の子どもが外集団をいかなるものとして認識するのかが、彼女/彼らの自立支援において重要なファクターであることがわかる。したがって、児童養護施設における退所に向けた短期的支援であるリービングケアの大切さは言うまでもないが、それに加えて、児童養護施設の子どもには、在所中に外集団と生活を共にすることをとおして、好意的経験をすることが提供される必要があると考えられるのである。

しかし、児童養護施設の子どもが外集団と生活を共にすれば、必ず好意的経験を積めるというわけではない。児童養護施設の子どもに対する差別的な眼差し²は子どもにとって負の経験となるに違いない。また、社会的養護当事者自助グループ代表である塩尻(2013:39)の「私たち当事者にとって社会に出ることは、異文化の地域に飛び込むのと同じ」という言葉は、外集団における好意的経験の難しさを物語っている。

そこで、児童養護施設の子どもにとって、生活を共にする中で好意的経験を積めるような外集団である地域社会とは、いかなる質を有する必要があるのかを明らかにするために、岩手県西和賀町(旧沢内村)を事例として調査研究を進めてきた。なぜなら、西和賀町(旧沢内村)では、1980年代中頃から児童養護施設の子どもを地域で受け入れる地域養護活動がおこなわれており、それを経験すると、児童養護施設で生活している「子どもが落ち着く」(NPO法人輝け「いのち」ネットワーク2010:2)と言われてきたからである。

以上をふまえ、本報告の目的は、西和賀町(旧沢内村)を事例として取りあげ、社会的養護児童の育ち・育てを支援可能とする地域社会の特徴を明らかにすることである。

なお地域養護活動とは、日常生活から離れた地域をフィールドとして、児童養護施設の子どもを施設の職員と地域住民等が協働して養護する諸活動のことである。

II. 方法

1. 調査の方法

1) 聞き取り調査

西和賀町の居住者、及び出身者に聞き取り調査を実施した。西和賀町において現在、取りくまれている活動や、これまでに取りくまれてきた活動、町民の普段の様子に関する質問に対して答えてもらう形態と、西和賀町の「ひと・もの・こと」をめぐる自由な語ってもらう形態を組み合わせた半構造化インタビューを採用した。インタビューは1回につき1時間30分~2時間程度である。インタビューではICレコーダーを使って録音し、後に逐

語録を作成した。

今回の分析では、個人インタビュー9人分のデータを資料として用いる。彼女/彼らは、合併されて西和賀町となる前の旧沢内村出身で現在も居住している者、旧沢内村の出身ではないが現在は居住している者、現在は旧沢内村に居住していないが出身である者のいずれかである。

調査協力者（年齢：調査当時）		調査日	調査場所
Aさん	80代男性	2011/8/24	調査協力者の自宅
Bさん	80代女性	2011/8/24	調査協力者の自宅
Cさん	70代男性	2011/8/26	調査協力者の職場
Dさん	70代男性	2011/8/25	調査協力者の職場
Eさん	50代男性	2012/8/23	調査協力者の自宅
Fさん	50代女性	2011/8/26	調査協力者の職場
Gさん	40代男性	2011/8/27	町内の公共施設
Hさん	30代男性	2011/8/26	調査協力者の職場
Iさん	30代女性	2015/2/23	調査協力者の職場

2) 調査地

調査対象地である西和賀町は、旧沢内村と旧湯田町の合併により2003年に誕生した。同町は、南北約50km、東西約20km、総面積は590.78 km²、人口6,123人、世帯数2,370世帯（2015年10月31日現在）の岩手県西部に位置する中山間地域である。本報告で取りあげる調査協力者の居住地、あるいは出身地である旧沢内村は、1950年代半ばでも豪雪・貧困・多病多死の三重苦に悩まされていた。しかし深澤晟雄（1905－1965）が村長に就任して以来、村民の生命を尊重する行政施策が強力に推し進められた。その際、住民自らの要求を住民自らが知恵を出し合って解決するという手法が重視された結果、「自分たちで生命を守った村」として有名になったところである。たとえばそのことは、1961年の65歳以上の国保10割給付や1962年の乳児死亡率ゼロの達成等からうかがい知ることができる。

2. 分析の方法

本研究では、インタビューをとおして収集したデータを、SCAT法を参考にして分析する。具体的には、まず、聞き取りデータの中から、西和賀町（旧沢内村）の特徴を示すデータをセグメントとして切り出す。その際、住民が当たり前であると思っている事柄で、かつ、住民以外の人間にとっては違和感のある事柄に注目する。なぜならそこに住民特有の行動様式、すなわち、地域社会の特徴が表れていると考えられるからである。次に、セグメントの中で重要となる要素を取り出してコードを割り当て、最後に複数のコードをカテゴリ化した。

3. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉大学社会福祉学部研究倫理審査委員会に承認され、日本保育学会倫理綱領、日本社会福祉学会の定める研究倫理指針を遵守しておこなったものである。

調査に際しては、調査協力者に対して事前に研究調査の依頼文書を提示し、研究調査協力同意の意思確認をおこなった。調査当日、再度、調査者より研究依頼文書の内容について説明をおこない、「同意書」2通に署名を得た。1通は調査協力者に手渡し、他の1通は調査者が受け取り保管することとした。研究調査の依頼文書には、「研究の目的」、「調査・分析の方法」、「調査協力者の中断・保留の権利」、「入手資料の管理方法」、「入手資料の使用方法」、「調査結果公表のさいの倫理的配慮」が記載されている。

研究結果の公表にあたっては、すでに著作物等で固有名詞が公表されているもの以外の地名や人名が特定されるような固有名詞は、ランダムにアルファベット表記とした。

Ⅲ. 結果

岩手県西和賀町では、1980年代中頃から児童養護施設の子どもの地域で受け入れる地域養護活動がおこなわれており、その経験により、子どもは認識が広がるという好意的経験を積んでいる（井上・笹倉2015）。しかし、だからと言って、西和賀町が他の地域社会とまったく異なっているというわけではない。古い共同体に見られがちな特徴も有しており、たとえばそれは、次の語りにみられるような、血縁の重視や裏表のある人間関係、新参者の疎外感にみられる。

土着しているし、地域、血縁が大きいと思う。先祖をたどっていけば、ここはこうだというようなものが見えてくる。（Gさん、40代男性）

裏表がすごくある。心で思ってることと違うことを平気でいう。（Eさん、50代男性）

顔と名前と一致しないと、最初にきた人はホームシックになる。胃潰瘍とか胃炎になった人がいる。（Fさん、50代女性）

西和賀町に上記のような側面もあることに注意を向けながら、以下では、同地域社会が有している特徴を3点に分けて整理する。なお、今回の分析で使用したデータは、合併されて西和賀町となる前の旧沢内村出身で現在も居住している者、旧沢内村の出身ではないが現在は居住している者、現在は旧沢内村に居住していないが出身である者によるものであるため、正確には、西和賀町というよりも、合併前の旧沢内村という地域社会の特徴となっている。

1. 経済資本所有量の少ない時代から現在に至る文字文化への親和性

【文字との出会い】

私はね、亡くなったお婆ちゃんに字を教えてもらったんですよ。お婆ちゃんは、火ばしで灰の中に字を書いて「○△（名前）」の「○」の字はこうやって書くんだよ、というように教えてくれました。（Cさん、70代男性）

【活字情報の活用】

（深澤村長は）広報はビタミン剤だと言った。ビタミン剤は上から下には効かない。だから、住民の意見を十分に聞いていくことから出発した。広聴活動を完全にして、住民の考え方を大事にしていかなければならない、住民の生活要求、地域課題を十分に吸い上げることをした。（Aさん、80代男性）

【活字情報の効果】

地震があったときに、寒い時期だから被災地にこたつを集めて送るということになって、それで有線放送で呼びかけたんだけど、その時には全然集まらなくて、広報で呼び掛けたら、一気に集まったというようなことがありました。（Fさん、50代女性）

【文字への抵抗感のなさ】

（保育所の）保育料どうしようか、とかというようなのは俺達の世代（がした運動である）。（略）幼児教育が大事ということで、3人子どもがいたら2人目は半額、3番目はただにするとか、請願した。署名活動とかは保護者がした。子どもを保育所に通わせていない家でも、こういうところはお願ひすればみんな書いてくれる。（Eさん、50代男性）

【文字との出会い】では、明治生まれの祖母が孫に文字を教えた時の様子が語られている。紙と鉛筆ではなく、火ばしで灰に文字を書いたということからも、この村の貧困状況が透けて見える。経済資本の所有量の少なさは非識字に結びつきやすい。明治時代ではなおさらであろう。しかし、旧沢内村では、経済資本の所有量が必ずしも非識字に結びついてはいないことがうかがえる。

【活字情報の活用】では、深澤村長が住民の生活要求や地域課題を十分に吸い上げた村政を推進していく際に、広報誌を「ビタミン剤」と称して、活用したことが語られている。広報誌に重要な役割を担わせることができたのは、旧沢内村の住民が文字文化への親和性があったからであろう。なぜなら、非識字率が高ければ、広報が全戸に配布されたとしても、それが情報として機能することはないからである。

【活字情報の効果】では、有線放送による音声情報よりも、広報誌による活字情報が有効であったと語られている。旧沢内村では、有線放送も広報活動の一翼を担っており、たとえば、「暮らしと健康」というような自主編成の長寿番組もあったと言う。したがって、有線放送が広報活動に果たした役割も見逃すことはできないが、旧沢内村の地域住民に

とって活字広報の果たす役割の大きさを知ることができる。

【文字への抵抗感のなさ】では、1980年代の保育所の保育料に関する署名活動の際に、「みんな」が署名に協力したと語られている。老若男女を問わず、多数が文字を書ける人たちであったと認識されていることがわかる。

このように旧沢内村の人たちは、経済的には貧困状況におかれていたが、文字文化への親和性があり、その傾向は現在も続いていると言える。

2. 地元愛に裏打ちされた高い自負心と仲間意識をともしなう地区住民意識

【敏感な感受性】

基本的に何もない、他の市町村から比べると何もない、便利さがない、信号機、コンビニもない。すごく不便だけど、何かひとつのことをやろうとすると、みんな集まってきてくれるんだよね、人の感覚がよい。（略）やっぱり人のぬくもりと肌感覚でわかる行動力がある。（略）人の生き死に対してものすごい反応が強い。そういうことをくぐってきた人はやさしいまちだね、って言える。（Hさん、30代男性）

【選択的対人関係】

こっち（＝沢内）へ帰ってきた頃はすごく嫌だった。すごく嫌だった。（沢内の人）は裏表がすごくある、心で思ってることと違うことを平気でいう。内面と外面が違う。（略）その頃は、この村は何を言っても結局だめ、それに甘んじている沢内の人嫌、と思ってた。でも、俺も少しずつおとなになってきた。そういう人がいるからいいんだ。こういうところで生きていく術なんだと。（略）他の地域では、そうやって人とつきあわない、ここに帰ってくると、つきあうからわかってくる。外からやって来る人にとっては、他の田舎と比べると寛容な所かなと思う。永住する人にも、期間限定の人にも、どっちの人にも寛容だと思う。わかんねえ。（Eさん、50代男性）

【濃密な人間関係】

都会と違う、何が違うのかなって思うけど、土着しているし、地域、血縁が大きいなと思う。先祖をたどっていけば、ここはこうだ、というようなものが見えてくる。そういうふうな部分で根ざしている部分がある。なんだかんだと隣近所の悪口を言ったりしても、「あそこのかあちゃんどうだこうだ」って言うけど、最終的に「いなくなれば淋しいべ」と言う。そんな関係があるということですから。（Gさん、40代男性）

【地区対抗意識】

卓球大会、婦人バレーボール大会、老人スポーツ大会等様々なスポーツ大会をやって、年間総合得点制にした。1位が10点、3位が7点というようにした。すると、卓球は3位だ

けど「婦人バレーボール大会はもらいますね」みたいになっていく。最後に村民運動会で表彰をするという形をとった。(略) 毎晩必死で練習が始まる。スポーツの時間が増える。若妻のバレーボール大会では、男性群が声をかける。ある地区で指導する人がいると、「こっちも指導してくれ」となる。でも他人のチームは指導したら損をする、みたいな話にもなっている。地域の名誉ということになると、おばあちゃんたちが、孫の子守をする。地域をあげて応援する。「あの時のボールを、おめえさ拾ってたら」みたいな話も出て、大会の前の晩は「早く寝ろ」とお嫁さんに言うおばあちゃんもいたりして。(Cさん、70代男性)

【投票意識】

〈最近では、若い人たちが選挙に行かないって言われているけれど、どうしてまじめに選挙に行くのか?〉

基本、(選挙には)行きます。関心というよりも、行くのがあたりまえだから。選挙、パスしたことないです。行かないのは有り得ない。他の選択肢はない。義務感?。(Iさん、30代女性)

【投票理由】

〈西和賀町は投票率がとても高いですね〉

(投票率が高いのは)その地区、その地区の議員を落としたいという意識があるだけ。町で(=町全体のことを考えて)議員を選ぶのではなく、地域の代表を選ぶ選挙だから。(Eさん、50代男性)

【敏感な感受性】は、旧沢内村のことだけでなく、西和賀町全体のことを語った言葉である。自分たちの住んでいる町には、便利さという点では何もないが、誇り得る財産として「人のぬくもり」と「肌感覚でわかる行動力」があるということが、「人の感覚」という言葉で語られている。たんなる行動力ではなく、「肌感覚」でわかる行動力であるというのは、「3」でも詳述することになるが、若い人たちが人数の割に広い面積の花壇づくりに取り組もうとしていたときに、花植えが始まると、お婆さんたちがどこからともなく手伝いに来てくれるという【間接発信への対応】という話などにも見てとれることである。

【選択的対人関係】では、いったん村を出て就学、就職をした人が、縁あって村に戻ってきた時、村の人がどれほど嫌であったかが語られている。村の人は「内面と外面が違う」し、「何を言っても結局だめ」で、そのような実態を変えていこうとせず、それに甘んじている村の人に対して反感を抱いたと言う。また【濃密な人間関係】では、「地縁、血縁」という濃厚な縦横の人間関係にある村の人たちを「土着」という言葉で語っている。「なんだかんだと隣近所の悪口」を言う日常の姿がリアルである。

【敏感な感受性】の語りでは、町の良さがダイレクトに語られているのに対し、次の2つは、どちらかと言えば、旧沢内村のマイナス的な側面も含めた語りである。しかし、そ

もそも、自分たちの村に関心をもつことがなければ、マイナス的な側面を語ることすらないであろう。地元愛があるからこそ、村の人たちにこうあって欲しいという理想があり、そのギャップが時には村の人に対する不満感を呼び起こすのではないか。このことは、前者では「つきあうからわかってくる」、後者では、悪口を言う相手であっても、亡くなると結局のところ淋しく感じられる「そんな関係がある」という言葉で語られている。嫌な部分が見えてくるのは、濃厚な人間関係があることの裏返しであると、客観的に述べられている。

加えて、前者では村が、「外からやって来る人にとっては、他の田舎と比べると寛容」であると語られている。濃厚な人間関係のある田舎では、どちらかと言えば、身内意識が強く、外から来る者に対して排他的である場合も多い。しかし、旧沢内村は、濃厚な人間関係と同時に、外に開かれた寛容な人間関係を築くことも可能であると言う。このような柔軟性はどこからくるのであろうか。前者の語りに「こういうところで生きていく術」という言葉がある。「内面と外面が違う」し、「何を言っても結局だめ」で、そのような実態を変えていこうとせず、それに甘んじていることも、「地縁、血縁」の縦横の人間関係にあることも、村の人たちがどうしてもなく濃厚な人間関係にからめとられているというよりも、むしろ、そのようであることを「生きていく術」として選びとっていると言えるのかもしれない。

【地区対抗意識】では、他地区に負けじと力が入る村全体のスポーツ大会の中では、嫁姑関係や、夫と妻の関係の風通しがよくなると語られている。Hさん(30代男性)によれば、今でも母親が出にくい町にもかかわらず、である。ここからは、村の古い人間関係をも解消させるぐらいに、自分が住んでいる地区のために頑張るという地元愛と同時に、時と場合によっては、古い人間関係がいつも簡単に組み換えられるという柔軟性を読み取ることができる。

旧沢内村と出会って驚かされたことのひとつに、その投票率の高さがある。【投票意識】で語られているように、老若男女を問わず、すべての世代に選挙へ「行くのがあたりまえ」であるという意識が浸透していることの結果であろう。しかし、その理由は、どうやら政治意識が高いからでもないようである。【投票理由】で語られているように、自分の住んでいる地区の利益のために、地区から代表者を出したいという思いによるところも大きいと考えられる。しかし、自分の意見を反映してくれる人を代表として選ぶということがあながち悪いことではない。旧沢内村の高い投票率は、地元愛の裏返しであると読み取ることでもある。

このように旧沢内村の人たちは、自分が生まれ育った地域社会に対して深い愛着と自負心を抱いており、それが様々な地区住民活動に反映されていると言える。

3. 必要性の共有により頻繁に繰り返される対話と具体的アクション

【課題の掘り起こし】

福祉懇談会をやって歩いた。社協の職員と役員。毎晩、歩いた。共通して出たのは雪が大変だ。調べてみれば、よくよく話を聞くと3つの状況がうかびあがってくる。(Dさん、70代男性)

【課題整理と取りくみ】

2人、3人と(高齢者、身体障害者、母子寡婦家庭の問題に関して)目覚めた人が集まって学習会などをやって組織づくりをやっていた。(Dさん、70代男性)

【正論の重視】

〈沢内で児童養護施設をつくろうとしたら、J町だったらどうなると思うか〉

どうですかね。やっぱり、え、なんで、になる。田舎なので。そういう新しいものに抵抗する。

〈そこで説明するとどうなるか〉

説明があれば納得はしてくれると思います。(Iさん、30代女性)

【真摯な受けとめ】

〈課題をみつけて話し合いをするというスタイルはどこで身につけたのか〉

自然に。こういうふうなものの考え方、最近するようになったと思う。ここの地域の人
はまじめ。こちらがふるとすごい真剣になってものごとを考えてくれる。それほど真剣でなくてもすごい真剣になって考えてくれる。そういう根差したところがそうなんでしょう。
(Gさん、40代男性)

【自己発信の奨励】

しゃべるのが苦手だっていう人がしゃべるのおもしろいねって帰っていくことがある。
間違った考え方なんてないんだからどんどん意見をいってこい。そういう難しい話、わ
かんないから、自分がこの町で生きていくときに、自分の考えを述べてなんにも悪いこと
ない。何か月後の3月締めで上程、というようなかたいものじゃない。コミュニティを自
然発生的に作ろう。そういう町になんきゃいけない。かつてやってきたような行脚、婦
人会。あの時代のようなかちつとした型、即効性があるものではない。(Hさん、30代男性)

【自分自身への問いかけ】

深澤村長を語るときには、生命尊重の理念はそのとおり、それを具現化していくときに
住民自治の精神がある。自分が考えてこうしたいああしたいと思っているわけです。こう

やれ、ああやれでなく、じゃあ自分がどうすればいいかな？ という問いかけをする。そうすることによって自分がそうだな、そこに向かっていくためにどうするか、ということ
を住民サイドで考えてもらう。(Cさん、70代男性)

【直接発信への呼応】

(子どもを預けるということを) やってる人はいます。ちょっと働いてなかった方が働き口さがしていた人。預かってくれない？ って言う人がいました。学校の先生で保育所に入れられなくて、じゃあ、わたしがばあちゃん先生やります、って方がいらっやって。(Fさん、50代女性)

【間接発信への呼応】

〈Gさんご自身が助け合いのなかで生きてるなあと感じる時、結のなかで生かされていると実感するのはどういうときですか〉

日々そうです。花を植えた。りんどうを植えよう。1か月くらいの間に決めた。3人ぐらいで決めた。まわりの人はまたむちゃなことするな、と思ってたと思う。広い面積で会社から(ある程度は)人をだす。じゃあ朝やろうとなる。それをやると70、80ぐらいのお母さんたちが来てくれる。そのへんが有難いなあ。(Gさん、40代男性)

【興味・関心からの呼応】

ここの人たちっておもしろいからやってみようってすぐ来るんだね。なんていうのか、やっぱり人のぬくもりと肌感覚でわかる行動力。いいよ、俺が足りない分ここやってやるから、出店やってやるから。人をまとめる、自然発生的にできる。(Hさん、30代男性)

【自己発信からの展開】

発信はしなきゃいけない。発信するとやってくれる。仲間内から始まる。どこそこの彼女が仕事に復帰したい、でも困ってる。0歳児からの保育所をつくりたいね。どこそこのお母さんが保育士もってて、そういう仕事したいんだけど、いまは仕事がないから家にいるんだよね。集まりは様々。機会が多い。集まる機会が多い。どうする？ まず集まる。顔をあわせる。(Hさん、30代男性)

【発信の工夫】

(親子登山に) 中には来ない人も何人かいるかもしれないけれど、やり方、しくみをうまくやれば、登るのが苦手な人は登ったときの焼肉を準備してくれるとか、かかわるっていうか、この地区性から、案外、終わったあとから酒、飲もうという人も出てくるし。(Eさん、50代男性)

【課題の掘り起こし】では、各地区の課題を明らかにするために、各地区を回って福祉懇談会を開き、その地区の人たちと膝をつき合わせながら、課題の掘り起こしをおこなったことが語られている。このような課題の掘り起こしは、深澤村政時代に各地区に入り対話集会を開いた「行脚と対話」を想起させる。

また、【課題整理と取りくみ】では、特定のテーマに関して問題に気づいた人が、まずは少人数で学習会を始め、そのことをとおして組織化を図り、課題解決をおこなう方法が語られている。このような課題解決の方法は、1970年代に旧沢内村でおこなわれた、2つの散居集落の再編と移転³に際して、新しい村づくり活動の方針となった「三せい運動」（一人ひとりがせい、話し合ってせい、みんなでせい）を想起させる。

【正論の重視】では、自分の出身地区で児童養護施設建設の話が持ち上がったとき、予想される住民の対応が語られている。田舎なのでなじみがないものへの抵抗はあると思われるが、きちんと説明すれば納得は得られると言う。ここからは、古い価値観や従来のしがらみがないとは言えないが、理屈に合った説明は、それらを乗り越えるに違いないという確信と、地区住民に対する信頼感が読み取れる。

【真摯な受けとめ】では、課題をみつけて話し合うというスタイルは自然に身についたことであり、それに関連して大切なのは、地域の人たちが自分たちの話を真剣に考えてくれることだと語られている。インタビューの他の箇所では、このような地域の人たちに対する感謝も述べられており、「根差したところ」という文言に注目すると、相手の話を聞いて真剣に考えるという対応が、課題をみつけて話し合いをするというスタイルを身につけることにつながっていることがわかる。

【自己発信の奨励】は、旧沢内村と旧湯田町の違いを超えて、両町合併後の西和賀町の将来について語られている。自分が生きていく西和賀町の将来を見据えた発言に、間違った考え方というようなものは存在しないのだから、積極的に発信していこうという前向きな姿勢が読み取れる。また、先に述べた「行脚と対話」に比べると、発言の重視は共通しているが、即効性を期待するよりも柔軟かい対話の必要性が述べられている。

【自分自身への問いかけ】では、深澤村政の核となる生命尊重の理念を具現化していく際、住民自治の精神が大切であり、それは、自分がどうすればよいのかという自分への問いかけであると語られている。先に述べた「三せい運動」の精神が、住民自治の精神と大きく重なっていることがわかる。

【直接発信への呼応】では、復職を考えているが保育所の利用ができなくて困っていると、年配の女性が「ばあちゃん先生やります」と手伝ってくれる人が現れるという話が語られている。また【間接発信への呼応】では、広い面積にりんどうを植える取り組みを早朝におこなっていると、「むちゃなことをする」と思っていたであろう70代、80代の年配女性が手伝いに来てくれるという話が語られている。どちらにも共通するのは、困っている人がいれば見て見ぬふりをしない、具体的に行動に起こす年配女性の存在である。このような行動は若い世代にも見受けられる。

【興味・関心からの呼応】は、西和賀町の若者が、何か企画をするとそこにおもしろさを見出しすぐに集まり、しかも足りないところがあれば自ら手を挙げて解消しようとする姿が語られている。

では、子どもの預かりやりんどう植えの手伝いは、周りの人たちが当事者の困りごとを「察する」ことで生じているのであろうか。【直接発信への呼応】の語りにある、「発信はしなきゃいけない。発信するとやってくれる」という発言は、困りごとを発信すること、言い換えれば、困りごとを顕在化することの重要性が強調されていると言える。子どもの預かりでは「預かってくれない？」と発信したのであり、りんどう植えの手伝いでは早朝にりんどうを植える姿をとおして発信したのである。

困りごとを発信すれば集まってくれる人たちがいる。しかし同時に、人が集まりやすいなやり方や仕組みの工夫も考えられている。【発信の工夫】では、親子登山にこない人がある可能性を想定し、登るのが苦手な人であっても、例えば登った場所で焼肉を担当する、親子登山には参加しなかったが打ち上げには参加するなど、かわり方を開いたものになっている。参加者の意識だけに頼るのではなく、参加するという具体的なアクションにつなげるためのやり方や仕組みが考えられていると言える。

このように旧沢内村の人たちは、気になることや困ったことがあると、その都度、気軽に集まって対話を重ね、できることから行動を起こしていると言える。

以上から、社会的養護児童の子育ち・子育てを支援可能とする西和賀町（旧沢内村）という地域社会の特徴は、1. 経済資本所有量の少ない時代から現在に至る文字文化への親和性、2. 地元愛に裏打ちされた自負心と仲間意識をともなう地区住民意識、3. 必要性の共有により頻繁に繰り返される対話と具体的アクション、という3点であることが明らかになった。

IV. まとめ

本稿の目的は、西和賀町（旧沢内村）を事例として取りあげ、社会的養護児童の子育ち・子育てを支援可能とする地域社会の特徴を明らかにすることであった。聞き取り調査で収集したデータをSCAT法を参考にして分析した結果、西和賀町（旧沢内村）という地域社会の特徴は、1. 経済資本所有量の少ない時代から現在に至る文字文化への親和性、2. 地元愛に裏打ちされた自負心と仲間意識をともなう地区住民意識、3. 必要性の共有により頻繁に繰り返される対話と具体的アクション、という3点であることが明らかになった。

ところで、西和賀調査（2011～2015年）をとおして、旧沢内村の60代・70代の人たちからは、旧湯田町との違いに関する話をしばしば耳にした。しかし同時に、旧沢内村の30代・40代の人たちからは、旧沢内村と旧湯田町の違いを超えて、西和賀町の未来を創造していくという語りにも出会った。具体的には次のようなものである。

若い人たちってというのはこの土地で生きて行くという意識が強いので、湯田エリアの人、沢内エリアの人って分けないでなにかやっていけないか（Hさん、30代男性）。

疲弊したこの町でどうやって生きて行くのか、諸先輩方とはちょっと違う。なんでそんな（旧沢内村と旧湯田町が）けんかしているんだという気持ち強い（Hさん、30代男性）。

湯田と合併したときに、若い人たちが（旧沢内村、あるいは、旧湯田町にこだわるのではなく）西和賀町という動きがあった。町長選のときも「お宅の方どう？お宅の方がなったらこうなんだよな」（というように）若い人たちに垣根がない（Gさん、40代男性）。

旧沢内村という地域社会に根差した歴史や文化があるように、旧湯田町にもそのような歴史や文化があるに違いない。また、旧沢内村がそうであったように、旧湯田町においても、西和賀町をどのようにとらえるのかという点において、世代間で温度差があると思われる。

旧沢内村と旧湯田町が互いに影響を与え合いながら、西和賀町という地域社会の特徴が生み出される可能性がある以上、今回、取りあげることでできなかった旧湯田町の人たちの語りを検討する必要があると言えるであろう。その上であらためて、西和賀町という地域社会が、なぜ、社会的養護の子どもの子育て・子育てを可能とするファクターになっているのかについて考えてみたい。今後の残された課題である。

＊本研究は、日本学術振興会平成22-24年度科学研究費（研究課題番号：22500707，研究代表者：井上寿美）助成を受けておこなったものの一部である。

¹ 認定NPO法人ブリッジフォースマイル調査チーム（2013）は、全国の児童養護施設で中高生、及び退所者の自立支援に関わっている職員を対象におこなわれたものであるが、東京都福祉保健局（2011）は、東京都所管の児童養護施設、自立援助ホーム、児童自立支援施設、養育家庭を退所して1年から10年経過した人のうち、施設等が連絡先を把握している人を対象におこなわれたものである。そのため、ここでは児童養護施設等と表記している。

² たとえば次のような発言である。「外では施設で暮らしているということで、いやな目に遭ったこともあります。一番きつかったのは小学校四、五年生の頃、『汚いから近寄らないで』とか言われて……」（『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会 1999：67）。「ありもしないことを言われたり、思われたりすることもありますよ。『施設の子は一週間に一回しかお風呂に入っていない』とか、友だちが遊んでくれないので理由を聞いたら、『お母さんが「施設の子」とは遊んじゃダメって言うから』と言われたことがありました」（『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会 1999：132）。「『施設にいたから』ってへんな固定観念をもたないで欲しい。そういうレッテルを貼らないで欲しいんです。何かあると『施

設の子だから』とか言うのはやめてほしいと思います」(『子どもが語る施設の暮らし2』編集委員会 2003: 34).

³ 2集落の再編と移転の目的は、「豪雪山村の劣悪な生活条件、旧い封鎖的社会構造を都市的に改変」することであった。(山本 1976: 94).

【文献】

相澤 仁 (2008)「施設退所後の年長児童への新たな支援策」『社会福祉研究』103, 47-53.

井上寿美・笹倉千佳弘 (2015)「社会的養護児童の子育ての社会化が子どもの認識に与える影響—地域養護活動における『ひと・もの・こと』との関係に注目して—」『関西福祉大学発達教育学部研究紀要』1, 17-24.

『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会 (1999)『子どもが語る施設の暮らし』明石書店.
『子どもが語る施設の暮らし2』編集委員会 (2003)『子どもが語る施設の暮らし2』明石書店.

認定NPO法人ブリッジフォースマイル調査チーム (2013)『全国児童養護施設調査2012 社会的自立に向けた支援に関する調査』.

NPO法人輝け「いのち」ネットワーク (2010)『ホームステイの記録』.

大村正樹 (2006)「信頼してもいいんだ」『児童養護』37(1), 31-34.

笹倉千佳弘・井上寿美 (2015)「外集団との関係からとらえた社会的養護の子どものエンパワメント実現に向けた支援—児童養護施設退所後の生活困難解消を視野に入れて—」『日本教育社会学会第67回大会発表要旨集録2015』324-327.

塩尻真由美 (2013)「アフターケア より多くの人たちとつながっていくための当事者活動」『子どもと福祉』6, 37-41.

立川博保 (2000)「事例研究 アフターケアを通じて見えてくるもの—つかのまの適応と自立」『児童養護』31(1), 43-46.

東京都福祉保健局 (2011)『東京都における児童養護施設退所者へのアンケート調査報告書』.

山本正一 (1976)「岩手県沢内村湯田村田野畑村の集落再編移転」『国士舘大学文学部人文学会紀要』8, 91-109.

全国社会福祉協議会 (2009)『子どもの育みの本質と実践』.